

草野心平

草野心平

彌生書房刊

©1975

検印省略

所々方々

1975年11月15日 初版印刷

1975年11月25日 初版発行

著者 草野心平

発行者 津曲篤子

発行所 株式会社 彌生書房

東京都新宿区中町18 電話・東京(265)3707(代表)

印刷・(株)精興社 製本・大口製本印刷(株)

<落丁・乱丁本はお取りかえいたします>

0095—75170—8525

目 次

十二月

風	八
エサの変化	二
「日赤」富士	三
池の妖気	五
ステッキ	七
忙しい春	一〇
今年の畑	三
雉鳩の巢	一四
安いものはどうまい	一六
日本のテレビ	一六
ふるさとの歌まつり	一〇
銀座と富士山	三

食・酒・郷土

あけびの皮	三
つきたての餅の味	三
五草粥その他	四
春の味覚	四
山 菜	四
ビールは泡ごとググッと飲め	五
青紫蘇の酒	五
近頃の自分の酒	五
磐梯山界限	六
相馬野馬追祭	六
永泉寺の広葉杉	七
願成寺阿弥陀堂	七

外国点々

ソ連点々	八〇
中央アジア紀行	八三
パリの泥棒	八六
パリ・その象徴	八九
知らなすぎたハワイ	九三
活火山へのあこがれ	九七
三月の螢	一〇一
インドからタイへ	一〇三
万里の長城	一〇七
方々の石	一一一

所々方々

色んな正月	一一六
-------	-----

年賀状	三〇
歌会始の思い出	三六
宮中での一夜	三八
運命の人	四一
火の車	四四
スキー	五二
色紙の怖れ	五五
正月用	五九
物物交換	六三
伊豆の旅	六九
方々の果物	七六
鹿児島エビ	八二
小鳥のエサ	八五
兎の気持	八七
卒業証書	八九

五光	二九二
九州の旅	一九五
城島原今昔	一九七
岡城趾	二〇〇
二つの詩碑	二〇三
賢治の歌曲	二〇五
アベベの猫柳	二〇九
病氣の花子	二一一
二人の作家	二一四
世界三景	二一九
原始の美	二二一
九州点々	二二四
掲載誌一覧	二三八

十二
ヶ
月

風

ヨコタテ一米半の花川戸助六はいまはちっちゃな絵ハガキになり。
まひるの太陽をイナイイナイする。

これは八年程前に書いた「風」という詩の一節だが、その頃私はよく風上げをしたものだ。たった一人で。ウチのすぐ近くの潤れ田の畔で。

いまいる東村山の自分の家から約五十米のところに広い水田地帯が展げていた。秋津川からモーターで水を吸いあげ、いちめんの水田を灌漑していた。そのモーター小舎が水田のへりの雑木林のはじっぽにあった。春先きはげんげの紫、夏は蛙のコーラス。そして冬は稲の切株の潤れ田の広いキャンパス。風上げにはもってこいの場所だった。

玄よ。黒よ。

あれが見えるか。

(永遠のなかのひとりぼっち。)

てのひらに伝わる。

かなしい。

充満弾力。

玄と黒、二匹の犬が私の尻上げの近くで遊んでいた。釣人にとってはそのツキの手ごたえが何んとも言えない快感らしいが、尻上げの手ごたえの、それこそ「充満弾力」は男性的でそして愛^{かな}しいものだった。さんざん上げてから――

糸まき用の大金槌を霜柱の土堤に突き刺し。

おれは一服する。

一服して枯れ草に火をつける。

けむりのはるかにゆれる絵ハガキ。

オーボエの。

風。

かじかんだ指にパイプをもつての私服もうまいし、子供の頃ふるさとの田ん圃の畔でよくやった野火を、六十歳を過ぎた年頃にやるのは郷愁そのもののようにもあった。オーボエの風が突如唸りをあげて糸が切れ、風はへんぼんと舞いあがり、それを追いかけて行つたが、結局は一キロも離れたあたりの櫟の高枝にひっかかっていたりした。

ところが今はどうだろう。わが風上げの広っぱは某私鉄の専用グラウンドになっている。その前は某私立大学の新校舎設立予定地だった。水田はブルトウザアで平面になり、監理者の家が建った。げんげの紫も蛙のコーラスもなくなったが風上げはまだできたし犬をつれての散歩もできた。友人の犬だった黒は自動車にひかれて死んだが、ウチにはベンという新しい犬もきた。玄は甲州犬、ペンはホイベツト種。まるで性格のちがった二匹の純血を連れて私は四季の時々を、自分が名づけた私だけのこの「秋津っ原」を勝手に歩けたものだが、いまは私鉄のグラウンドになったので余り勝手ぶりは出来ない。その代り新しい家は建たないので広い空間に満ちている空気はきれいだ。

エサの変化

ウチの池には鯉たちにまじって、草平、草太、草之介と名付けた草魚もいるが、これらは初めは鯉のエサは食わずに菜っぱ類などをきざんだのを食べていた。もともと草魚の原産地は中国で水草類を食べることから草魚という名前をつけられたのだろうから、水草でなく畑の「草」を食べるのは、まあまあ自然の成行きといってもいいだろうが、それらがだんだん鯉のエサを食べるようになった。食パンや鯉用の栄養食や残飯類まで食べはじめた。鰻のつる吉もパンになれたし、元来鯉や鮒などもキャベツや白菜も好むので、エサに殊更気を配ることもなくなり、こっちは大変助かるようになった。

ところでこの池をもひっくりかえして、私のウチの庭ときたら十五、六坪あるかなしかの、昔流に言えば猫の額ほどの面積しかない。それでも雑木類が裸になると色んな鳥がくるようになった。今まで馳せ参じたのはヒヨドリ、尾長、四十雀、キジバト、雀、目白などだが、これは皆んなちがつたエサ好みをする。

雀のエサ場は庭に半分埋めた石臼の上だが、米と麦をのっけておいた。電気釜用のコップに八分目ほどたっぷり。翌る朝、米は一粒もなくなっていたが、麦は一粒もへらないと思える程のこっていた。それから度々、同じように米と麦とをのつけたが、結果はいつも同じだった。それからはもう麦はのっけなかった。けれども残っていた麦はそのままにしておいたが、いつの間にかその麦も一粒も残らずキレイになっていた。他の鳥が麦を食べたのか、米がなくなったので雀自身が食べたのか、それは見とどけたわけではなかった。けれどもいまは、矢張り雀がたべたのだろうと思っている。というのは或る日雀が林檎をついばんでいたのを見たからである。ウチではいつの頃からだったかははっきりしないが、榎やエゴや槐や朴の夫々の枝の一本をナイフで切り、それに四つ切りにした林檎を突き刺しておくならわしになっている。またベニウツギや錦木の枝に刺すこともある。尾長やヒヨの、林檎は好物だからである。四十雀は豚の脂が好きなので、その脂身を糸でしばって枝にぶら下げたりする。

冬もまんなか辺になると小鳥たちは毎日、かわるがわる「猫の額」にやってくる。そうになると雀のことはつい忘れがちになるのだが、雀は犬小屋が菜園のわきにあるので平気らしい。犬小屋にはいってペンの残飯を食いあさる。このホイペット種の犬はひどく鷹揚で雀が自分の背中にのっかっても平気で外の景色など眺めているのだ。

恐らくその残飯もないときだったろう。雀が榎の小枝の林檎のカケラをついばんでいたのは。そ

れから砂糖水を容れたガラスの器が矢張り枝にしばりつけてあるが、他の鳥なら当り前だが、雀が嘴を突っこんで不思議な味だと言わんばかりに頸をかしげていたこともあった。

「日赤」富士

いま私はこの一文を、武蔵境の日赤の五階のベッドで書きはじめたのだが、考えてみると今度が六度目の入院である。十二年前の最初の退院の時「この次に入院する時は死ぬ時ですよ。どうぞよろしく」などとふざけながら婦長さんに言ったものだが、六度目になってもまだ死なず、この五階の婦長さんも三代目になっている。時々一代目、二代目の婦長さんが様子を見にきてくれたりする。ずいぶん日赤ズレしたものだと思う。今度もはじめの頃は点滴とかお湯などが続いて味気なかったが、いつの間にか一カ月もとうに過ぎてからだの調子もよくなったし退屈もしない。一日一日が早すぎるようにたつてゆく。

もういいって何度も言うのだが、日曜日になると必ず、やきとり屋の通称「マッちゃん」が河岸で買ったというイクラを持ってやってくる。(一度だけは生ウニの時もあったが。)その度ごとにマ

ッちゃんは「退屈しなえげ、センス」と言う。「ちっともしなえな、退屈なんて」と自分もハンコを押したように答える。

朝だけはパン食だが、七時半、昼食は十一時半、夕食は十六時半。おそくなくても早くなっても十分とはちがわぬ。調子のよくなった近頃は、モノを読んだりモノを書いたり、自分としては珍しく割合ながい詩を四つも作ったし、6号と8号のスケッチブックにパステルの絵を十五、六枚は描いたかな。このパステルの相手は雲と富士山である。他にはウチのバラ畑からもってきたバラを一枚だけ。

スモッグの東京ではあるけれども、このペランダからは富士が見える。それは日の出直後だったり、まっぴるまだったたり、日没の黒富士だったり、いろいろだが、流石にそれらが見えるのは三日に一度ぐらいのものだ。それはもう馴れているので（何しろ六度目の五階個室の生活だから）ガラス窓を透して見る空の色合いや雲のたたずまいで大体は分る。

雲の変化はスピーディで描いているうちに色んな風に変貌する。殊に曉と夕方は光の変動がめまぐるしく、一種の永遠を一瞬でとらえること、或いは一瞬で永遠を暗示するようなことは大変な敷い。

部屋は暖房になっているからいいが、バジャマのままでペランダに出るとひどく寒い。

恰度運がよかったといつては変だが、高村豊周氏の未亡人が形見分けたといっているものを